

平成26年度グローバルユースリーダー育成事業 「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」 事後活動連携強化プログラム

2015年2月6日～2月10日



平成26年度グローバルコースリーダー育成事業
「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」
事後活動連携強化プログラム

概要

日本青年国際交流機構の事後活動派遣代表者の3名が、事業終了後の活動の説明及び国内や世界各国のネットワーク作りについて説明するために沖縄県（那覇）から岩手県（大船渡）間に乗船し、事後活動セッションを2月8日（日）に開催したほか、セッション以外の時間には、船内で「世界青年の船」事業や「世界青年の船」事後活動を紹介するインフォメーション・デスクを設置し、参加青年と直に意見交換や情報提供を行った。

ねらい

派遣者は、事後活動連携強化プログラムにおいて、以下のねらいを持って事後活動セッション及びその他の自主活動を実施する。

- ・ 参加青年が、内閣府の実施する青年国際交流事業、日本青年国際交流機構（以下、「IYEO」）及び「世界青年の船」事後活動組織（以下、「SWYAA」）について理解を深められるようセッション及び自主活動に取り組む。
- ・ 事業終了後、IYEOやSWYAA等を通じて、様々な社会貢献活動にどのように取り組めば良いかを参加青年に伝えるために、日本及び外国の「世界青年の船」事業既参加青年がこれまでにしている事後活動の事例を紹介する。
- ・ SWYAAのネットワークや既参加青年が所属する団体（NPO団体等）を活用・連携し、充実した活動を発展させていくことの重要性を伝える。
- ・ 参加青年が事業後に、陸上・船上・海外研修で学んだことをいかして自国で何ができるかを考え、具体化するための活動案を作成し、ほかの参加青年と共有するためのサポートをする。
- ・ 既参加青年及びIYEOの代表として、参加青年と事後活動についての意見交換を行うとともに、参加青年の事後活動についてのアドバイス等を行う。

派遣日程

月 日	日 程
2月6日(金)	派遣代表者 東京集合、那覇へ 「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」参加青年と合流・乗船 沖縄県那覇港出航
2月7日(土)	事後活動セッション実施に向けての準備、船内にてSWYAA及びIYEOブースの設置
2月8日(日)	事後活動セッション実施に向けての準備、船内にてSWYAA及びIYEOブースの設置 事後活動セッション(14:30～17:00)
2月9日(月)	事後活動セッションの振り返り、船内にてSWYAA及びIYEOブースの設置等
2月10日(火)	岩手県大船渡港着、派遣代表者解散

派遣者

- ・ 木村 大輔 第16回「世界青年の船」事業既参加青年
(写真中央) 青森県青年国際交流機構会長
- ・ 小田 サオリ 第14回「世界青年の船」事業既参加青年
(写真右) 新潟県青年国際交流機構事務局長
- ・ 横塚 尚子 第17回「世界青年の船」事業既参加青年
(写真左) 日本青年国際交流機構関東ブロック幹事



活動内容

2月8日 事後活動セッション

事後活動セッション翌日に実施されるプロジェクトマネジメント・セミナーと連携させることをねらって実施した。

セッション1 14:30-15:45

ねらい:

- ・参加青年の事業終了後の活動の意識を高めるとともにSWYAAの活動について理解を深める。
- ・事後活動の事例を知ることにより、具体的に事後活動をイメージできるようにする。

内容:

- ・事後活動セッションの概要説明、SWYAAの活動紹介、既参加青年の紹介、派遣代表者の活動紹介(活動を始めたきっかけや活動内容について)、参加青年の振り返り



三名の派遣代表者による発表の要旨:

木村大輔

高校時代にロールモデルとなる人物との出会いが不足していた自分の経験を基に、青森県の高校生に向けて既

参加青年を招へいし、高校生と対話の機会を作っている。青森南高校に勤務する既参加青年を中心に、地球市民の意識を身に付け、それぞれが取り組みたい夢や目標を持って長期的な進路を考え実践、後押しすることを目標とした一泊二日の合宿を行った。常識と言われることがそれぞれ異なること、世界ではまだ紛争が続いており、平和な状態とは恵まれた環境であること、これからの社会は多様性と向き合い、多様性の中から新たな価値を作る人材が求められていることを高校生に向けて発信したことを紹介した。広い視点から物事を考え、挑戦し続ける大切さを伝え、それぞれの未来の目標について考える機会を作ったことで、高校生の進路への態度が変わり、主体的に挑戦しようとしている生徒が増えたことを発表した。

横塚 尚子

第17回「世界青年の船」事業に参加した後、東京都IYEOで8年間役員として活動し、現在は関東ブロック幹事を務める。事例発表では、既参加青年の仕事と事業が与えた影響を学ぶ東京都IYEOのイベント、「いろんな仕事セミナー」を取り上げた。「事後活動は決して難しいことではなく、一人の思い付きからプロジェクトが生まれるもの。可能性は無限に広がっている」というメッセージを参加青年へ贈った。

小田 サオリ

昨年、新潟県IYEOと「船と翼の会ふくしま」が共同で行った「第1回チューリップ大作戦@ふくしまxにいがた(にいがた花絵プロジェクト)」について紹介した。これは、球根育成のために開花後廃棄されてしまうチューリップ花を使って花絵を作る、新潟では毎年恒例のイベントである。これを震災その後の原発事故により生活が変わってしまった福島の子供たちに届けたいという、一人の会員の案から実現までの経緯、その成果について順を追って紹介した。事後活動として具体的にどのような活動をしたら良いのか、何から始めたら良いのかを迷っている参加青年に向けて一人の思い付きでもIYEO会員の協力を得て、そのネットワークをいかし、プロジェクトを始めることができるというメッセージを伝えた。

派遣代表者のセッション1の所感

SWYAAの活動を紹介することで、各国で事業終了後も継続的に活動ができること、世界的なネットワークを知ってもらうことができた。また、三名の派遣代表者が具体的な活動事例を発表することで、事後活動の多様な在り方を示すことができた。



セッション2 15:45-17:00

ねらい:

- ・ 同じようなテーマやキーワードに興味を持った参加青年同士で、事業終了後に取り組みたい活動について意見交換を行い、次の日のプロジェクトマネジメント・セミナーにつなげる。
- ・ 参加青年が自分の興味に基づいた活動の企画をすることで、主体的に事後活動がイメージできるようにする。

内容:

- ・ 自分自身をしっかり振り返り、引き出した各自の興味に応じて似た興味を持つ参加青年同士でグループを作り、意見交換を行った。
- ・ 計10の小グループに分かれ、参加青年は各グループのテーマでそれぞれが活動してみたい内容について考え、企画を行い、共有した。

各グループの活動案

1. 社会正義

各テーマに応じて、同じ日にそれぞれの国で課題に向き合うプロジェクトを実施。ソーシャル・メディアを活用し、影響力を高める。

- ・ LGBTの権利保護
- ・ 教育格差
- ・ 人権教育

2. 教育

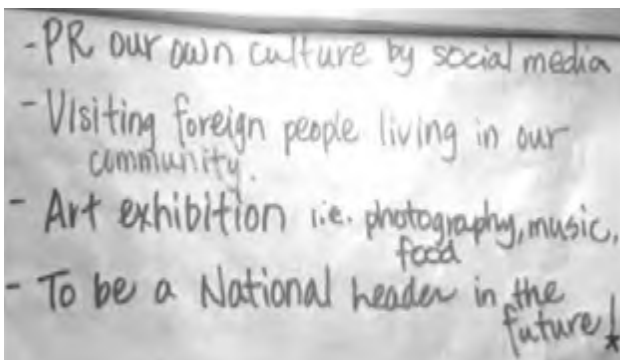
教育システムに変革をもたらすため、それぞれが連携した形で学校訪問などを通じた活動を実施する。

- ・ リーダーシップの強化
- ・ 異文化理解促進
- ・ 自然、冒険、スポーツなどの体験活動
- ・ 研究力の向上
- ・ 文化紹介イベントの開催
- ・ 外国を訪問したときに小学校訪問を行い、文化を紹介する。

3. メディア・コミュニケーション

ソーシャル・メディアを活用し、自国や事後活動についての情報発信を行う。

- ・ それぞれの国の紹介
- ・ 写真展、美術展の開催（交互に）
- ・ SWYを始めとした内閣府青年国際交流事業のPRプログラム



4. 自己啓発

- ・ 旅行を通じた教育
- ・ クラブ・ユース（様々なバックグラウンドを持った青年たちの活動の場）の設立による意識啓発プログラムの実施
- ・ 起業家及び起業家意欲のある人へのリーダーシップ・サポート



5. 環境

- ・ ごみ削減運動
- ・ 植樹活動
- ・ 環境教育の実施
- ・ 環境活動へのキャンペーンの実施

6. 慈善活動

- ・ 支援を必要としている友人・知人・家族を始めとし、身近なところから社会に貢献する活動を行う
- ・ 事業参加の経験を伝えることで、周囲の能力開発を促進

7. 音楽、芸術

- ・ SWY International Music Exchange Programの実施（様々な国から芸術家やミュージシャンを集め、コンサートを行うほか、民族音楽などを学ぶワークショップを開催、芸術教育の普及を各地で行う）

8. 家族、友人、人間関係

- ・ 自己の能力向上を通して、他者の成長を支援していく個人の活動
- ・ 地球社会や内閣府青年国際交流事業ブランディングに貢献する他者を支援する活動の推進

9. 文化

- ・ 他国の文化を紹介するワークショップの開催
- ・ 日本文化・伝統を紹介する体験型イベントの開催
- ・ 料理教室の開催
- ・ 参加国の文化紹介を促進するフォトクラブの設立
- ・ 国際的なピア・ラーニングの研究

10. その他

- ・ 世界各地で特定分野に分けたグループ別ミーティングを行い、それらの分野におけるネットワーキング、プロジェクトの企画を行う。
- ・ ウェブを通じた広報活動の実施
- ・ 資源・資金の確保によるグローバル・プロジェクトの支援

事後活動派遣代表者の所感

参加青年のネットワーキングを心がけて

木村 大輔

第16回「世界青年の船」事業（2003年）の参加青年として事業に参加してから11年の月日が流れた。自分のステップアップに大きな影響を与えてくれた本事業に事後活動セッション担当者として戻り、地元の青森県での活動を紹介する機会を持てたことに感謝している。

今回の事後活動セッションでは、事業終了後のそれぞれの姿を考えることができるような内容を心がけた。大きなテーマを考えることは簡単だが、実施するには難しい場合もある。そのため、自分が協力している高校でのグローバル教育の事例を紹介し、参加青年誰もがロールモデルとして高校生に向け発信できる機会があるということを伝えた。全体では、それぞれが自分の人生を振り返り、自分は何をしている時に幸せを感じるのか、これまでの目標の中で、達成できたことやできなかったことは何か、それはなぜなのか考える機会をじっくり持った。自分が最も熱意を持てるものを見つけてもらうためである。そして、同じような目標を持った人同士をつなげることで、事業終了後に自分がやってみたいことを共有し、仲間同士で協力し合い実現できるようなネット

ワーキングをイメージしてセッションを行った。

事後活動セッション時に感じたことは、何らかの形で社会貢献をしたいと思っている参加青年が多いこと、そして、自国の文化や伝統、歴史について発信したいという人が多かったことである。また、他国のことを自国の人に紹介したいという意見も多く、これらは、この事業での学びの成果だと思う。自らが地球社会の一員であるということに気付き、様々な国のことに対して興味を持つことが、それらを追求していきたいという積極的な学びの原動力となるのである。

自分が参加青年だった頃を思い出した。この事業に参加したことで得た機会は数多くあるが、参加青年からこの事業で得ることができる一番大切なものを改めて教わった。それは、多くの悩みや幸せを共有できる友人を得ることである。年齢的にも一回り違ってきている青年との交流を通して、多くの希望を持つ大切さを知り、自分が参加青年にとってのロールモデルの一人となっているかもしれないということを気付かせてくれた。

身近なアイデアから事後活動の一步を

小田 サオリ

第14回「世界青年の船」事業（2001年）への参加から13年が経過して、既参加青年代表として「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」に関わらせていただき、青年たちの事後活動を促すと同時に、自分にとっても、事後活動の良い振り返りの機会となった。

事後活動セッション前半は、事後活動組織についての説明、外国青年を含む既参加青年からの活動報告、後半はワークショップの中で、自分が事業に参加した原点に戻って、自分が一番興味があることを再確認し、共通の興味がある参加青年同士で事後活動としてどんなことをしたいか、アイデアを出し合う場とした。印象としては、教育、異文化理解に関するキーワードが多く見られた。

個人の発表では、昨年、新潟県青年国際交流機構（新潟県IYEO）と「船と翼の会ふくしま」が共同で開催した「第1回チューリップ大作戦@ふくしま×にいがた」について紹介した。新潟県IYEO会員の1人の思い付きが、周りの会員の協力を得たり、ネットワークを活用したりすることで実現し、期待していた以上の成果を得て、次年度は規模を拡大して継続することになった経緯について、プレゼンテーションをした。地方在住で選出された参加青年は、県に一人、二人ということも珍しく

ない。事業参加中は同年代で共通の志を持った仲間と共にいるためモチベーションも高いが、いざ地元に戻って何かをしたいと思っても同期の仲間とは遠く、一人で始めるのは難しいと感じてしまうことがある。こうした地方からの参加青年に向けて、最初は身近なところからアイデアを得て、同じ地域に住むIYEO会員を新しい仲間として一緒に活動を始め、団体のネットワークをいかして少しずつ大きくすることもできるという事例紹介にした。セッション後には次年度のプロジェクトに参加したいとの申し出を受け、多少なりともメッセージは伝わったのではと思った。

全体を通して自分が参加した頃よりも、プログラムはより密度の濃い進化したものになっていること、参加する青年たちの異文化への理解と同時に自国の文化を理解しようとする強い意欲、社会に貢献したいという積極的な姿勢などを感じることができ、良い刺激を受けた。世代や参加青年の年度を越えた人と人とのつながりの大切さ、そこから生まれる可能性を再確認し、事業を終えた参加青年たちを迎える側として、新しい既参加青年のサポートに努めたい。

この機会を与えていただいたことに感謝したい。

私が参加青年として第17回「世界青年の船」事業（2004年）に乗船してから10年目を迎え、既参加青年として再び事業に参加する機会をいただいた。

事後活動セッションでは、私たち事後活動派遣代表者3名と、既参加青年のナショナル・デリゲーション・リーダー2名から事後活動の事例を発表した後、参加青年は「自分自身のこれまでを振り返って興味を絞り込み、その後、関心あるカテゴリーで分けた小グループで事後活動につながるアイデアを掘り下げる」ワークショップに取り組んだ。

私からの事例発表では、昨年度まで役員を務めた東京都青年国際交流機構（東京都IYEO）のイベント、「いろんな仕事セミナー」を一例として取り上げた。セミナーでは数名の既参加青年が職業についてと内閣府青年国際交流事業への参加が人生にどのような影響を与えたかを発表する。私は、「定着しているようなイベントも始まりは一人のアイデアから。やりたいことがあれば諦めてしまわず、周りに思いを呼びかければ実現に結び付き、各人に事後活動の可能性は広がっている」というメッセージを添えた。

私には「参加青年が事後活動を豊かにするサポート」というミッションがありながらも、私が日々実感している「事後活動の面白さ」を伝えきれたかは心許無い。その一方で、私は今回のセッションを通じて計り知れない

程の収穫を得ることができた。参加青年への発表に当たってはこの10年を振り返って、「そもそもなぜIYEOで活動しているのだろうか？」という根本の目的に立ち返り、今後やりたいことやなすべきことを考える好機となった。また、船という空間に身を置くと、10年前に参加青年だった頃の思いがよみがえり、現在の自分への反省と共に、気持ちを新たにすることができた。事業参加のおかげで私が今までに得たものは数知れず、それらを還元すべくIYEOや社会に更に貢献したい、という思いを強く感じている。また知識やプレゼンテーションスキル、英語スキル等、不足している点も挙げればきりが無く、学びたい意欲も募らせている。

本事業は、事業名に「リーダー」を冠し、プログラムでも「リーダーシップ・セミナー」「プロジェクトマネジメント・セミナー」が盛り込まれている。そのためか、参加青年のリーダーとしての目的意識が非常に高く感じられ、今後も参加青年たちが地球規模の絆をいかながら刺激し合う姿が目に見え、既参加青年となった彼（女）らの今後に広がる可能性が楽しみであり、そのような姿に私も触発された。

事業に参加する年度が異なっても、同じかけがえの無い経験をした絆がある。各世代が持ち味を出し合い有意義な活動を繰り広げるために何ができるのか、今回の経験をいかして今後の活動につなげていきたい。

第8回SWYAA国際大会(トルコ大会)

2014年8月30日～9月3日(公式プログラム)
2014年9月3日～9月7日(オプション・ツアー)



第8回SWYAA国際大会

SWYAA国際大会の目的

- 1) 参加国や参加回の異なる「世界青年の船」事業、グローバルリーダー育成事業、グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」の既参加青年が出会う機会を提供し、意見交換を通じて国際ネットワークの強化を図る機会とする
- 2) 既参加青年が訪問国の文化と人々を知る機会とする
- 3) 既参加青年がボランティア活動に従事し、社会貢献活動に参加する機会を提供する
- 4) 世界各国で実施されている事後活動について情報交換をする機会とする
- 5) SWYAA国際大会の開催や参加を通じてSWYAAの活性化を図る

概要

大会名称： 第8回SWYAA国際大会（第19回インターナショナル・リユニオン）

開催日程： 公式プログラム：2014年8月30日～9月3日
オプション・ツアー：2014年9月3日～7日

主催： 日本青年国際交流機構
トルコ「世界青年の船」事後活動組織

同時開催： 「世界青年の船」事業事後活動協議会

参加費： 公式プログラム1,650トルコリラ（早期割引1,300トルコリラ）
オプション・ツアー750トルコリラ（早期割引650トルコリラ）

参加者： 153名（26か国）

第8回SWYAA国際大会は、トルコのイスタンブールで2014年8月30日から9月3日の日程で開催された。9月3日から7日までの期間には、カッパドキアでオプション・ツアーが実施された。

第8回SWYAA国際大会の実施に当たって、トルコ「世界青年の船」事後活動組織は、様々な活動における視察先の選定から調整にいたるまで、詳細な日程の準備を行った。

活動日程

日付	時間	活動
公式プログラム		
8月30日(土)	終日	参加者到着
8月31日(日)	7:00- 8:30	<朝食>
	9:30- 11:00	オリエンテーション
	11:30- 13:30	ファティ市長との昼食会とファティ地方自治体の城壁周辺散策
	14:00- 17:30	スルタンアフメット地区(博物館、モスク等)見学
	20:00- 23:30	開会式及び歓迎レセプション
9月1日(月)	7:00- 8:00	<朝食>
	9:30- 18:00	プリンス諸島訪問 - ハルキ島(神学校訪問) - ブユックアダ島(馬車、サイクリング、水泳)
	19:00- 21:00	<夕食>
9月2日(火)	7:00- 8:15	<朝食>
	9:30- 12:00	事後活動協議会
	13:00- 14:00	<昼食>
	14:00- 15:00	パノラマ1453年歴史博物館視察
	15:30- 17:30	ミニアトルク視察
	20:00- 23:00	フェアウェルパーティー
9月3日(水)	7:00- 8:00	<朝食>
	10:00- 14:00	7コースに分かれての課題別視察(高齢社会、障害、環境、メディア、ボランティアと異文化理解、芸術とトルコ文化、教育)
	14:00- 22:00	自由行動
オプション・ツアー		
9月3日(水)	23:00	カッパドキアへ移動
9月4日(木)	8:30	<朝食>(バス)
	10:00- 13:30	大きな奇岩視察とホテルにて自由時間
	13:45- 14:30	<昼食>
	14:30- 17:00	ギョレメ屋外博物館、陶芸工房視察
	19:00	<夕食>
9月5日(金)	5:00	気球ツアー(オプション・ツアー)
	7:00- 8:30	<朝食>
	9:30- 12:30	デヴレント渓谷、ゼルヴェ屋外博物館視察
	13:00- 13:45	<昼食>
	13:45- 18:30	鳩渓谷、ユルギュップ、絨毯製作所、パシャバー、ワイン工房視察
	19:00	<夕食>
	21:00- 23:00	トルコ・ナイト
9月6日(土)	6:00	気球ツアー(オプション・ツアー)
	7:00- 8:30	<朝食>
	9:30- 12:00	ムスタファパシャ村視察
	12:30- 13:15	<昼食>
	13:30- 19:00	カイマクル地下都市視察
	19:30	<夕食>
9月7日(日)	8:00	帰国

8月31日(日)公式プログラム

第8回SWYAA国際大会(以下GA)の初日、世界各国から150人以上の参加者がそろった。ホテルにて行われたオリエンテーションでは、参加者たちが懐かしい顔ぶれとの再会に歓喜したり新たな出会いに心を躍らせる様子が見られた。

その後、ファティ地方自治体の城壁近くのレストランで昼食をとり、自治体の市長であるムスタファ・デミル氏からイスタンブールの歴史についてお話をいただいた。またGAの実行委員からトプカプという名称の由来や城壁についての歴史的経緯を中心に説明があり、歴史あるこの都市について理解を深めることができた。

午後はスルタンアフメット広場で貯水池を見学した。参加者たちは貯水池の水がどこから来るのか、どのように人々の元まで届けられていたのかなどを熱心にガイドに質問し、学んでいた。続いて自由時間があり、ブルーモスク、トプカプ宮殿、アヤソフィア考古学博物館といった近隣施設を各自が自由に選び見学した。アヤソフィアを訪れたり、カトリックとイスラムが融合したその姿に感嘆したり、それに対抗するかのように造られたブルーモスクやエジプトなど世界とのつながりを感じる遺跡等について興味深く話を聞いたりしている参加者の姿が見られた。

夜はボスポラス海峡クルーズで歓迎レセプションが行われた。美しい夜景の中で音楽、ダンス、そして、何より様々な国の個性的な民族衣装に囲まれ、皆、船に乗っていた頃のような感覚を抱き、それぞれが懐しむ充実した時間となった。



9月1日(月)公式プログラム

イスタンブールから船をチャーターし、プリンス諸島を訪れた。最初は、ヘイベリアダ島にあるハルキ神学校を訪問した。イスタンブールの喧騒から離れたこの島は、救急車・消防車などの公共車以外の車両の通行を禁止している。島内の移動は主に徒歩か自転車又は馬車で、この島の環境に対する取組を感じる事ができた。ハルキ神学校は11世紀、つまり、ビザンツ時代に建設されたギリシャ正教の神学校である。建物内には金箔の美

しい宗教画の教会やキリスト教を学ぶための教室が残されていた。現在は廃校となっているが、99%がイスラム教というトルコの地で、このようなキリスト教の学校が残されていることが印象的だった。

午後はブユカダ島へ移動し、島を自由に散策するグループと、海岸で泳ぐグループに分かれ、思い思いの時間を過ごした。

移動手段として使われたフェリーでは、デッキに集まって歌を歌ったり、語り合ったりして、「世界青年の船」事業で使用した船のスポーツデッキで過ごした時間を思い出す体験となった。

9月2日(火)公式プログラム

事後活動協議会

1. 内閣府青年国際交流事業及びSWYAA国際連盟に関する報告

発表者： 大部沙絵子(内閣府国際企画担当参事官補佐)、
齋藤珠恵(SWYAA国際連盟事務局長)

始めに内閣府の大部沙絵子参事官補佐より「世界青年の船」事業の現状やプログラムの変更についての説明と、その後継事業として2013年度に実施されたグローバルリーダー育成事業について報告があった。また、既参加青年を対象とした調査の報告と協力に対する感謝の意が示された。調査結果は、2015年に内閣府のホームページで閲覧が可能とのことである。

続いて、齋藤珠恵より、SWYAA国際連盟の新しい憲章が2014年1月に発効されたという報告に加え、各国のSWYAA代表者と政府代表者を招き、2014年6月に行われた会議の報告があった。この会議では「世界青年の船」事業の継続や事業をより良いプログラムとするための様々な提言がされた。また、SWYAA国際連盟がどのように「世界青年の船」事業に貢献できるか、加盟費(100米ドル)の用途、分科会の設置についての提案、次回「世界青年の船」国際連盟代表者議決会議(VSIR)について話し合われた。SWYAA国際連盟の共通活動としては、「ホームステイ+1」が紹介された。

2. SWYNZAAリユニオン「ストーキング・ファイヤー(旧交を温める)2014」について

発表者： ティレニ・ラテマ(SWY25)

今年度行ったリユニオンで、ニュージーランド北島・ロトルアの郊外にあるハナズ・ベイの復興プロジェクトの一環として、オーガニック・ピザオープン作りに参加した。土などの自然素材のみで完成させたピザオープンで、参加者はピザを焼いて楽しんだ。このような活動は、リーダーたちを結び付け様々な活動のアイデアを実現させるのに有効である。

3. 日本青年国際交流機構 (IYEO) について

発表者：高下正晴 (IYEO副会長 / SWY3)

IYEOの概要、会長の交代、2014年度の目標などについての説明があり、その後スリランカ教育支援プロジェクト「One More Child Goes To School」や「IYEOチャレンジ・ファンド」などのIYEOの主な活動が紹介された。また、一般財団法人青少年国際交流推進センター (CENTERYE) が主催する国際理解教育支援プログラムへの協力についても報告があった。

4. 参加青年の選考について

発表者：ホセ・サノ・タカハシ (SWY11 / 16)

SWYAAペルーは、SWY16から参加青年の選考に関わっている。今年度実施される「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」の参加青年の各段階での選考方法について説明があった。広報、説明会、オンライン登録、書類応募、パネル・インタビュー、リーダーシップ・キャンプ、最終面接などのプロセスを経て参加青年が決定される。事業をより良いものにするため、より良い事後活動や社会貢献を行うためにきめ細かな選考が行われている。

5. SWYAAオマーンの活動について

発表者：サミ・アル・ブレイキ (SWY23)

SWYAAオマーンは、Clubs Youth Campに参加したり、幅広い既参加青年が参加する会食を企画したりと活発に活動を行っている。日本国大使との夕食や天皇誕生日のお祝いのイベントに参加するなど、日本との関係も緊密である。また毎年「SWYAAオマーン・デー」には、献血をするなどの社会貢献活動も行っている。データベースを整理したり各種SNSを利用したりFacebookで「SWY Family」ページを作ったりと、ITの利用も盛んである。新しく作られたSWYAAオマーンのロゴも披露された。

6. SWYAAインドの活動について

発表者：ピンビット・バ・パサー (SWY2)

SWYAAインドでは貧困家庭の子供たちへの教育支援として、日本国大使館やJICAと協力してオープンスクールを開いている。ほかに、ヘルスケアや水管理に関するプログラム、恵まれない子供たちを対象とした技能研修(コンピュータ、裁縫、写真など)、日本語レッスン、折り紙大会、ユース・リーダーシップ・プログラムなども実施している。日本人大学生が日本語や日本文化を教える機会をセッティングしたり、日本の大学と協力して交換プログラムを行ったりもしている。さらに、インドと日本の友好関係を築くために日本国大使館や国際交流基金など、様々な機関との連携を深めている。

7. SWYAAエジプトの活動について

SWYAAエジプトのこれまでの歩みや日本国大使館との交流・協力、東日本大震災に対する支援などについて、ビデオを用いての紹介があった。

8. SWYAAスウェーデンの活動について

発表者：カロリーナ・ホウラネック (SWY23)

SWYAAスウェーデンは、「One More Child Goes To School」や「Tupendane International」といったSWY関連の事後活動に対して資金援助を行い、SWY KIVA (マイクロファイナンス・プロジェクト) にも投資している。これは、SWYAAスウェーデンの少ないリソースを効果的に活用するためである。また、日本国大使公邸に招かれるなど、日本国大使館との交流にも力を入れている。

9. ロシアのSWYトレインについて

発表者：エリザベータ・モコーヴァ (SWY24)

SWYAAロシアは、2014年6月22日～7月6日に「SWYトレイン」を実施した。これはシベリア鉄道で約5,000kmを旅し、モスクワ、カザン、エカテリンブルク、ノヴォシビルスクを訪れるというプログラムである。12名の既参加青年が参加し、オプショナルツアーでイルクーツクへ向かった者もいた。今回は告知から申込締切日までに十分な時間がなかったが、機会があれば今後も企画を考えている。



10. SWYAAギリシャの活動について

発表者：コンスタンティノス・ツィガラス (SWY18)

SWYAAギリシャの事後活動としては、主に三つの活動が紹介された。一つ目は環境啓蒙活動として、6月5日の「世界環境デー」に際して実施されたイベントに環境省の協力で参加をした。二つ目は「世界青年の船」事後活動組織の共通活動である「ホームステイ+1」の実施をした。三つ目は社会活動として、会員が関わる障害児支援団体等のスポーツイベントの企画・実施をした。

11. SWY KIVA プロジェクトについて

発表者：ポニー・ターナー(SWY12)、
ジョシュア・ホアレ(SWY22)

SWYオーストラリアは、KIVAというオンラインを介した小口融資のマイクロファイナンスのプロジェクトを2011年に立ち上げた。このプロジェクトを通して、経済的な理由により資金提供を必要とする多くの人に対しての融資を提供している。SWY KIVAプロジェクトは、世界中の「世界青年の船」事業参加国を対象にしたもので、現在SWYオーストラリアが中心となり、ほかの国にいるメンバーと連携を取りながら支援を続けている。

12. 第2回「世界青年の船」事業リユニオンについて

発表者：リユニオン参加者有志

今年が25周年に当たる第2回「世界青年の船」事業の既参加青年が、今回のトルコのSWYAA国際大会にリユニオンを重ねて参集した。ステージに全員が上がっての笑顔の絶えないにぎやかな発表となった。1990年当時の第2回「世界青年の船」事業の様子、当時の参加者と現在の参加者の写真、自分の子供や孫の写真などを見せながらSWYファミリーが増えていっていることを紹介、そして25年たった今も変わらぬ友情が続いていることが報告された。



13-1. SWYAAバーレーンの活動について

発表者：ザファ・アルヒディ(SWY20)

SWYAAバーレーンの事後活動が大きく五つに分けて紹介された。一つ目は地域貢献活動として、孤児との交流、老人ホームの訪問、障害者との交流(折り紙指導など)、衣服の支援、病院への子供訪問である。二つ目は自己啓発活動としての応急処置の練習や日本語クラスへの参加である。三つ目はコスタリカ、ギリシャと連携している「Our World One World」プロジェクトの紹介である。四つ目はバーレーンの日本人コミュニティーとの交流をねらいとして、公式行事の参加、文化交流などを行っていることである。五つ目は2012年にバーレーンで開催されたSWYAA国際大会についてである。

13-2. SWY関係者向けのソーシャルアプリケーションの提案

発表者：オサマ・アル・バルシ(SWY25)

「世界青年の船」事業の既参加青年及びこれからプログラムに参加する人を対象にしたソーシャルアプリケーションに関して提案がされた。これは、参加者同士の交流を深めたり、互いの考えやプロジェクトを共有し問題解決をしたりすることなどを目的としたものである。また、事業に関連するニュース(国際大会の日程など)をアップしたり既参加青年のプロフィールなどの情報を検索したりできるようにすることも考えられている。今回の提案に賛成する人と今後計画を実行していきたいということであった。

13-3. 個人的な事後活動「KEYS」について

発表者：ヤコブ・アルナジェム(SWY24)

自身が行っている事後活動として、「KEYS」というリーダーシップ・プログラムについて発表があった。このプログラム実施において「世界青年の船」事業での経験がいかされている。

14. SWYAAスペインの活動について

発表者：SWYAAスペイン

SWYAAスペインは、東日本大震災の復興支援をする日本の既参加青年(高橋裕一郎、SWY13)が始めた「南三陸の玉手箱プロジェクト」に協力し、東北の被災者の手作り商品をスペインで販売した。また、ベトナム戦争の犠牲者へのサポートについても報告された。SWYAAスペインの新しいFacebookページも立ち上がった。



15. 個人の活動「Lost Lyrics」について

発表者：セオン・ミ・ジャン(サン)(SWY24、カナダ)

自身がアーティストであることから、貧困地区の若者たちの意欲・能力向上のため、若者たちがアートや音楽などを通じ自己表現できるようになることをねらった「オルタナティブ教育」のための活動を行っている。また、「世界青年の船」事業が縁で共同のプロジェクトをすること

になったラモン・ナラヤン(SWY16/24、ニュージーランド)(同じく若者の教育を手掛けている)と共にGA後にエジプトに行き、SWYAAエジプトの協力の下、日本国大使館で初の共同パフォーマンスを行う予定となっている。壇上で本人によるパフォーマンスも披露された。

各国及び個人の発表の後、質疑応答の時間が設けられ、事後活動協議会は終了した。それぞれの国ごとの活動だけではなく、複数の国が共同で実施するプロジェクトの発表もあり、そういった事後活動は「世界青年の船」事業ならではのものだと感じられた。

事後活動協議会終了後は用意されていたランチボックスをバスに持ち込み、昼食をとった。昼食後、パノラマ1453年歴史博物館を訪問した。この博物館では、名前のおり1453年のメフメト2世とオスマントルコによるコンスタンティノーブル征服をパノラマで体感できる。館内の展示はすべてトルコ語だが、音声機械を借りれば英語・日本語などでガイドンスを得ることができ、説明もわかりやすかった。オスマントルコによるコンスタンティノーブル攻撃の様子映像などは、映像だけでも非常に興味深いものであった。また最上階では、メフメト2世率いるオスマン軍がコンスタンティノーブルを陥落させたその瞬間の激戦地を360度のパノラマで見渡せるようになっており、臨場感あふれるものだった。トルコの歴史を知るととても良い時間となった。

次に、ミニアトゥルクを訪問した。世界最大級のミニチュアパークの広い敷地にはアヤソフィア、カップドキア、バムッカレなど、トルコ各地の観光名所と歴史的建造物がミニチュアサイズで展示されていた。各建物の前にある機械に入場券をかざすと説明の音声が届くようになっており、知識を深めることができた。GA参加者たちは、公園を回りながら建築物の前で説明を聞いたりと、記念写真撮影をしたりと楽しんでた。ミニアトゥルク自体も興味深かったが、周りの景色もとてもきれいであり癒される場所だった。

ミニアトゥルク訪問後、参加者は一度ホテルに戻った後、フェアウェルパーティーの会場のパフチェシエヒル大学にバスで向かった。大学はボスポラス海峡に面しており、イスタンブールの美しい夜景の見えるテラス付きの会場で行われた。パーティーの初めにあいさつや記念品贈呈、そして次回(2015年)のSWYAA国際大会開催場所の発表(フィジー)があった。参加者はおいしい料理に舌鼓を打ちながら、新旧の仲間と会話の花を咲かせた。中盤には、SWY24で生まれたSWYソングを参加者全員で歌ったりソーラン節のパフォーマンスを行ったりした。パーティー後半には、多くの人が部屋の中央でダンスを楽しんだ。笑顔あふれる、SWYらしい夜であった。

9月3日(水)公式プログラム

公式プログラムの最終日、参加者は7か所の訪問地から興味のあるテーマを選んで課題別視察を行った。

課題別視察 高齢社会

高齢者施設「Darulaceze Almshouse」を訪問し、この施設で精神分析医として働いているサルカン・エレバック(SWY22)から説明を受けた。

現在この施設には男性508名、女性448名が入居している。男女の居住スペースは別々になっており、広大な敷地内にモスクや教会等がある。また運動施設や娯楽施設等も充実している。入居費用は無料で入居条件は男性65歳以上、女性60歳以上が対象で個人では生活のできない方が入居している。経済力のある成人の子供がいる場合には入居できない。

参加青年は入居者と話をしたりボールを使った体操などを一緒に体験したり、一緒に折り紙を折ったりして交流した。また、ギターを弾きながら歌ったりダンスを披露したりもした。(感想:SWY22 森夏枝)



課題別視察 障害

ダウン症のある若者を支える「ダウン・カフェ」を訪問した。店内は色とりどりの明るい雰囲気であった。まず、ダウン・カフェ設立者でありIZEVという知的障害者教育基金のサルハン・シンゲン事務局長より施設概要について映像を交えて紹介していただいた。

ダウン・カフェは2001年に設立され、ダウン症の若者に社会参加の機会を提供し、自信をつけさせ、自立につながることを目指している。カフェで働く障害のある青年は20~35歳の27名で、交代で5名程がウェイターとして勤務している。常時数名のボランティアが手伝っている。カフェ内には多くの絵画が飾られ、その売上は募金に充てられている。将来的にはピラティスや語学のクラス開設といった事業拡大の計画もあり、なかなか社会と接しにくい彼らが地元の人々と直接交流を図れる場として可能性の広がりが感じられた。

障害のある青年と和やかに交流した後ランチを頂いた。ウェイターとして青年たちが食事を運ぶ様子を見

て、プロの顔つきで仕事に徹する姿にダウン・カフェという支援組織の存在意義が感じられた。

(感想：SWY17 横塚尚子)

課題別視察 環境

イスタンブール環境管理産業貿易社 (Istanbul Çevre Yonetimi San ve Tic A.S. 以下、İSTAÇ)が管理する医療廃棄物工場及び一般廃棄物 (家庭廃棄物) 処理場を訪問し、施設担当のオスマン・アクギュル氏よりİSTAÇの取組、処理方法などの説明を受けた。İSTAÇはEU最大の廃棄物処理会社で、医療用廃棄物はすべて赤い袋に入れることを病院に義務付けている。そこから数千のフィルターで有害物質を取り除き、更に医療廃棄物は自動焼却処理で高度に管理されていることを学んだ。トルコ全土の公共ゴミ箱はペットボトルやビンを分別していない。しかし、家庭廃棄物処理場で、自動処理及び手作業により分別を行っていた。しかも、生ゴミは堆肥にして公園や道路などに3%は活用することを義務付けることでゴミの再利用を効率的に行っている。工業見学を通して日本よりも進んだ技術と制度に深く感銘を受けた。

(感想：SWY21 塚田賢治)

課題別視察 メディア

「カナルトルコ」というテレビ局を訪れた。まず調査ディレクターのテオノン・ギュルメン氏から制作放送している番組の説明があった。カナルトルコはファミリー層へのエンターテイメント番組に力を入れておりドラマが一番人気だということだ。実はトルコのドラマはイエメンなど中東各国でも人気だ、と参加青年が説明し、世界規模でのトルコの番組の人気ぶりやマーケティングの様子がうかがえた。

ギュルメン氏にメディアへの規制の話をも質問したところ、9人から成る評議会という組織があり放送局に対して大きな力をもっているということ、また裁判所が内容に関して放送の中止を求めることもあることなどを教えてくれた。報道の自由の難しさを感じられた。

その後、テレビ局内のスタジオを見学した。日本のスタジオと違い、とてもスタイリッシュでオシャレに見え



た。また、SONY VEGASという日本では聞き慣れない編集ソフトを使っていたが、中東では人気だということだ。この日本製品は海外の方が人気という意外な事実だった。トルコの代表的なテレビ局の雰囲気がよく分かる貴重な課題別視察となった。

(感想：SSEAYP26 清水御冬)

課題別視察 ボランティアと異文化理解

「ピンク・エンジェルス」と呼ばれるユダヤ系トルコ人のボランティアが活動するパラット・オルアハイム病院を訪問した。

初めにコロンバ・カスト氏より、ピンク・エンジェルスや病院設立の背景についての説明を受けた。ピンク・エンジェルスは病院の利用者に対して、様々な心理的サポートをしている。それは患者へ生きる喜びをもたらすためであり、歌唱、ハンドクラフトなど形は様々である。またスペインから移り住んだユダヤ系トルコ人の社会とのつながり、この病院を設立した背景を伺いユダヤ系という少数派コミュニティの強さや影響力に感銘を受けた。病院の利用者約10名との交流の時間では、英語やトルコ語だけでなくヘブライ語そしてスペイン語なども飛び交う中、日本青年が日本の唱歌「ふるさと」をプレゼントした。それをきっかけに、各国の青年が自国の歌を披露した。そして、ピンク・エンジェルスが利用者と一緒にコミュニティソングとして歌っている曲を全員で披露してくれた。利用者の楽しそうな笑顔は忘れないだろう。(感想：GLDP 大野晴香)

課題別視察 芸術とトルコ文化

「YESAM料理アートセンター本部」を訪問。YESAMは有形、無形の料理の伝統や何世紀にもわたり広大な地理に住んでいたトルコ人によって作られた慣習の復活や立証を研究目的としている。

最初に、企画担当のオズデン氏よりYESAMで行われているトルコの歴史と現在、食文化や伝統についての記録や研究からトルコ料理の特徴について説明を受けた。北部・南東部・西部・中央部の地域で異なることや欠かせない食材、歴史と食文化のつながりについてなどであった。YESAMがある建物「ARMAGGAN」の4階にはプロの料理人がデモンストレーションを行える設計のキッチン等もあり、餡作りを見学した。餡作りは弟子入りをして学ぶという伝統があり、80度の餡を素手で練るプロの感覚と技は芸術的だった。「ARMAGGAN」はトルコ語の「armağan=贈り物」に由来されており、各階にはその名が表すとおり伝統手芸であるオヤの繊細なアクセサリー等の作品、食器、トルコ産原材料で作られたジャム等が美しく並べられていた。

今回トルコ料理はオスマン帝国時代からの長い歴史と地域の文化が深く関係していることを学んだ。またトルコ

が世界三大料理の一つであることを誇りに思うだけでなく、そのレシピや他国の伝統料理の要素が影響し合った食の歴史、社会構造、行事、信条、料理技術等も大切に正確に後世につなげていこうとする一面を知ることができた。貴重な経験であり、その取組にも深く感銘を受けた。(感想: SWY12 田名邊由美子、SWY21 杉谷さおり)

課題別視察 教育

ユルドゥズ工科大学を訪問し、本学の教授から説明を受けた。元々はオスマン帝国時代に貴族の宮殿として使われていたため、とても大学とは思えないほどの高級感が漂っていた。トルコで最も優秀な大学の一つということで、質問のほとんどがその入学制度に関するものであった。

トルコでは大学に願書を提出するのではなく、全国の統一試験で入学できる大学が決まる。ユルドゥズ工科大学はトップの成績を収めた1%ほどの生徒にのみ入学資格が与えられる。学部や専攻が機械によって適正判断され決まることは驚きであった。日本では自分の興味がある分野の研究をするが、トルコでは自分が最も力を発揮できると考えられる分野で研究をする、その違いがとても興味深かった。(感想: GLDP 永野さくら)

午後の軍事博物館の訪問は、訪問先の都合によりキャンセルとなったため、各々イスタンブールで自由時間を楽しんだ。

9月3日(水) オプショナル・ツアー

オプショナル・ツアー参加者はイスタンブールでのフリータイムの後ホテルに再集合し、バスでカッパドキアへ向けて出発した。オプショナル・ツアーに参加しない仲間たちとの別れを惜しみながらも、次の目的地に向け皆楽しみで仕方がない様子であった。この日は車中泊であった。

9月4日(木) オプショナル・ツアー

朝食は車内でとり、10時にカッパドキアに到着した。辺り一面、土色の世界であった。カッパドキアはペルシャ語で「美しい馬の地」を意味し、中心地であるギョレメ国立公園とその周辺が世界遺産に登録されている。まず長い月日をかけ浸食された奇妙な形をした大きな岩を見学した。かつて城として使用されていたとので、ところどころドアのような穴があいていた。数千年という長い年月をかけ浸食され形成された地形の壮大さに皆息を飲んでた。その後、参加者の疲労を考慮し急ぎょ予定変更となり、ホテルにチェックインした。昼食は洞窟レストランでとり、カーヌーンという琴のような伝統楽器の演奏を聴きながら牛肉の料理を堪能し、贅沢な時間を過ごした。その後、ギョレメ屋外博物館で洞窟の中に点在する教会を見学した。教会の中に描かれた壁

画は保存状態が良くカラフルで美しく、皆写真を熱心に撮っていた。アヴァノスの陶芸工房も見学した。ワイン用の容器製作のデモンストレーションを見学後、参加者の一人がろくろに挑戦するなどして楽しい時間を過ごした。様々な形と色彩豊富なトルコ陶器は特に女性に大人気であった。

ホテルでの夕食の時間には事業参加時の思い出話、トルコのお土産、各国の社会問題など、参加者同士の会話は話題が尽きず夜中まで続いた。時間がいくらあっても足りない様子だった。

9月5日(金) オプショナル・ツアー

気球ツアーの参加者は朝5時に集合し、気球に搭乗した。ホテルでの朝食後、ラクダの形をした岩のあるデヴレント渓谷へ、その後、ゼルヴェ屋外博物館へ向かった。洞窟の中に作られた教会が点在しており、教会には色彩豊かな壁画が残されている。敷地が広く1時間半の自由時間も時間が足りないほどであった。

午後は伝統的なトルコ絨毯を製造し販売する施設を訪問し製作過程や歴史を学んだ。熟練した女性が織る絨毯は目にも留まらぬ速さで出来上がっていき、またその美しさに感動した。トルコでは古くから男性が陶器を作り、女性が絨毯を織ることが仕事となっている。男性は結婚したいと思う女性の両親を訪れ目の前で作業し、壺の蓋と本体がぴったりと合わさるように作れたら結婚でき、女性は年頃になると自分で織った絨毯に結婚したいということが両親に伝わるような模様を入れ、気持ちを伝えたそうだ。

その後、煙突のような形の岩が並ぶパシャパーを訪れた。岩の中に妖精が住んでいるという言い伝えから「妖精の煙突」とも呼ばれており、人里を離れて生活した修道士が隠れるための岩も残っていた。

夕方ワイン工房を訪問し、地元で採れたぶどうを使ったワインを楽しんだ。乾いた土地であるものの、道端の店にもぶどうが実っており、豊かな土地であることが感じられた。夜はトルコの伝統的な踊りとともに食事ができるレストランを訪れた。参加者は踊り子にダンスを教えてもらったり、一緒に踊ったりしてトルコの夜を楽しんだ。

9月6日(土) オプショナル・ツアー

気球ツアーに参加する第2グループが早朝6時頃にホテルを出発した。夜明け前の暗い中、大きな気球が準備され興奮しながら搭乗を待った。着地前に取る姿勢など安全管理の説明を聞いた後、出発した。始めはぐんぐん上昇するため少し怖かったが、その景色の美しさにすぐに怖さを忘れた。朝日が差す中、気球から見るカッパドキアは言葉では言い表せないほど美しく、時を忘れた。

朝食後、ムスタファパシャという小さな村を訪れた。ここには昔ギリシャ人が住んでいたそうで、のんびりと

して古い町並みが残っていた。ギリシャのような風景の中にも洞窟を利用したような建物があり、その中に入ると不思議な感覚になった。

その後、カイマクル地下都市を訪問した。ここはなんと5,000人以上が迫害から逃れるために住んでいたという巨大な地下都市で、現在でも全容は解明されていないそうだ。外は日差しが強く9月であってもかなり暑く感じたが、地下に入るとひんやりして心地良い気温であった。地下8階まであり長期間生活するために台所や食料庫、ワイナリーに教会など様々な場所が作られており、その機能性に驚いた。

ここでカッパドキアでのツアーは終了し、参加者は空行きとイスタンブール行きの夜行バスに分かれて乗車

した。多くを語り合い更に絆を深めた旧友も、新しくできた友人も皆、別れを惜しんで最後のあいさつをしていた。翌朝7時頃空港に到着し、解散となった。



第8回SWYAA国際大会（トルコ大会）に参加して

日本青年国際交流機構副会長（第3回「世界青年の船」事業参加）高下正晴

トルコで開催された第8回SWYAA国際大会に佐藤恵一IYEO会長に代わって参加しました。私自身、第3回「世界青年の船」事業の既参加青年であります。SWYAA国際大会には参加したことがなく、今回の機会をととても楽しみにしていました。

最近の「世界青年の船」事業の既参加青年と話していると、「SWYスピリッツ」という言葉をよく聞きます。今回のSWYAA国際大会に参加して一番良かったのは、「SWYスピリッツ」が何たるかということを実感できたことです。それまでは、25年も前に事業に参加した私にとっては、「SWYスピリッツ」と聞いてもイメージはなんとなくできるものの、それがどういうことをきちんと言葉で表現することは難しかったのです。

イスタンブールの空港に着いたとき、SWYAAトルコのメンバーが迎えてくれて、他の参加者たちと待ち合わせ場所へ移動しました。遠くから見ただけでその一角だけ明らかに空気が違います。ただワイワイとにぎやかなだけでなく、エネルギーがあふれてくるような感じでした。合流すると、自己紹介の後、お互いに、「どこから?」「いつの事業に参加したの?」「あの人知っている?」「あの時こんなことがあってね。」と、話が尽きません。何度もSWYAA国際大会に参加している人は、大会ごとに会って仲良くなっている人もいるようで、「世界青年の船」事業を共通のプラットフォームに、人と人が、国境を超えて、世代を超えてつながっていく瞬間を到着したときにすぐに感じることができました。この感覚は、大会に参加しているプログラム中、パーティー、バスの中など、参加者と会うとき何度も感じることになりました。

大会では、イスタンブールをアジアとヨーロッパに分かつボスポラス海峡やその周りを船でクルーズする機会

があったのですが、さすが船の既参加青年だけあって、みんな室内には入らずに真っすぐデッキに直行です。最初のうちはめいめいに席や床に座って近くの人と話しているのですが、そのうちいくつかの輪ができて、デッキの前の方からはギターの音とメキシコの歌が、後ろの方からはアラビックドラムの音とアラブの歌が聞こえ始めます。周りでは一緒に歌う人、それを聞きながら談笑する人、皆その空間を楽しんでいます。参加者が自国の文化を披露できる力を持ち、周りの人も多様な文化をそのまま受け入れ、みんなでその空間を楽しむ。これも「世界青年の船」事業ならではの「文化」なのだと思います。

今回彼らと会って感じたエネルギーがあふれてくる感覚、国境を超えて人同士がつながる感覚、多様な文化をそのまま受け入れ、それを楽しむ感覚、それらすべては私が「世界青年の船」事業で感じたものだったことを思い出しました。そして、それらは世代を超えて同じように感じるということが分かったのは、SWYAA国際大会に参加したからだだと思います。世代を超えて持ち続けることができるこの感覚こそが「SWYスピリッツ」なのではないかと思ひますし、「世界青年の船」事業の貴重な財産であると思ひます。

今回のSWYAA国際大会は、150名を超える参加者があり、たいへん規模の大きな大会になりましたが、その運営のほとんどすべてをSWYAAトルコが行いました。少人数で、国内の各地域にバラバラに住んでいて、それぞれ仕事を持ち忙しい中で準備を進め、本当に苦労が多かったことと思ひますが、すばらしい大会になりました。SWYAAトルコの実行委員の皆様と大会を盛り上げていただいた参加者の皆様に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

この報告書では、今後、国際大会を主催する方々のために、大会の準備や実施における私たちの経験とアドバイスについて述べたい。

開催国への立候補：国際大会開催国に立候補する前に考慮すべきことは、事後活動組織が青少年関連省庁やその他の政府機関と連携できるかどうかということである。政府機関や地方当局が主催側に加われば強みになる。政府に協力者がいない国では、施設訪問の手配が難しいかもしれない。だが、政府と運営パートナーを組むことの課題についても時には考えてみなければならない。公式の承認を得ることや文書のやり取りに時間がかかったり、担当者が頻繁に代わったりして、プログラムの準備に遅れが出るかもしれない。宿泊施設、食事や飲み物、訪問場所や訪問施設等について干渉されることもある。表敬訪問を増やさなければならないかもしれない。表敬訪問が悪いということではないが、訪問相手が多忙で直前まで訪問が実現するか決定できないこともあり、プログラムの進行に支障が出るかもしれない。

加えて、多くの団体とパートナーを組むと、歓迎会に追加で人を招待することが必要になるであろう。文化によっては、招待する際に参加費用を持たなければならない。予算に余裕がなかったり、政府が招待者の支払いをしなかったりするのであれば、財務収支に支障が出ることになるかもしれない。歓迎会参加費をすべて負担しようとしたら、各追加招待者が主催者側の負担になるであろう。故に、異なる団体とパートナーを組むことは、良い点と悪い点を考慮しなければならない。

政府の援助なしにプログラムを組み立てるのであれば、個人的つながりをもう一度探してみると良い。事後活動組織の中に頼れる注目を浴びている人がいるかもしれない。積極的に彼らを組織に巻き込む必要はないが、オリエンテーションや事後活動協議会のための会議室を無償で手配してくれたり、電話一本で施設訪問を手配することができる。

考慮すべきもう一つの重要な問題は、準備と運営の両方に積極的に関わる会員数である。事後活動組織の会員が少なければ、準備段階で大きな問題が起こるかもしれない。実際、準備段階で意思決定に関わるチームの人数は、少数にとどめることを勧める。人数が多ければ、最終決定をするのが困難になる。しかし、プログラム開催中には、真剣に運営に関わってくれる、多くの熱心な人手が必要になる。プログラム中、積極的に動くことができるメンバーが十分いなければ、運営が困難になり、たちまち疲弊してしまうだろう。このためにもメンバー一人一人の能力、強み、弱点を客観的に把握しておくことだ。これは様々な役割を割り当てる際、とても重要であ

る。チームには様々なスキルを持つメンバーをそろえる必要がある。国際大会に参加すれば開催イメージがつかめるので、参加経験のあるメンバーが積極的に準備に関わるべきである。国際大会に参加したことがなければ、開催国に名乗りを上げる前に一度参加してほしい。

実行委員同士の関係も重要である。チームのメンバーは理解し合う必要がある。お互いの能力を知り、良い関係を築けば、プログラムの成功に貢献するだろう。

最も重要なステップは、プログラムの企画提案書の作成である。選考委員を納得させるには、自国が主催国として完璧であることを明確に示せば良い。確かな提案をするためには、訪問先の説明や利点を添えたオプション・ツアーの案を複数用意すると良い。提案に迷いがあったら成功しない。多くの候補地を提案するよりも、事後活動組織の会員と話し合い、最良のオプションを二つ三つ決めた上で、情報を提供すると良い。

主催国に決定したら、すぐ準備に取り掛かる必要がある。最初はたっぷり時間があるように思えても、あっという間に時間が経ち、慌ただしく最終準備に追われることとなる。より効率的に活動するには、余裕を持って開始することだ。運営を前進させるために、実行委員チームで度々ミーティングを行うと良い。

プログラムの草案：IYEOのガイドラインに沿って、前回までの国際大会プログラムを見直しつつ、プログラム案を作成すること。草案であっても、度々不要な変更をしない方が良い。ある程度、プログラムを企画してから草案を作成すれば、後でそれほど変更せずに済むだろう。プログラム案を急いで作成すると、度々変更することになり、運営の妨げになる。

毎日のプログラム開始時間を早朝にすることは勧めない。参加者が別れを惜しみ、夜遅くまで語り合いたがるかもしれない。夜の街の探索やクラブに行きたがる人もいる。前日の就寝が遅ければ、翌朝早くに開始するのは難しいだろう。多くの活動をプログラムに盛り込むには、早朝から開始しなくてはならないが、朝起きられないのであれば、活動には参加できなくなってしまう。予定をぎっしり詰めず、無理のないスケジュールを組むこと。遅刻者や不参加者がいたりして、土壇場でプログラムの活動を取りやめにするくらいなら、最初から柔軟なスケジュールを組むと良い。

広報：プログラムの広報をする段階になったら、ウェブサイトを立て、その他の広報資料を用意する。これらの資料は、参加者にプログラムの魅力を伝えたり、スポンサーを見付けたり、訪問先候補の施設の担当者を得たりするのに非常に重要となる。

事後活動組織の会員がウェブサイトを立てることも可能だが、必ずしもそうでなくとも良い。専門家に頼むことができる。いずれにしても、事後活動組織の会員の中で少なくとも一人はコンピューターの扱いに熟知している必要がある。専門家に頼む場合でも、チーム・メンバーがまめに情報更新できることが重要である。

これまでの国際大会のウェブサイトが参考になるだろう。サイトをチェックして、メニュー・バーを準備すること。ウェブサイトで一番重要なのは「よくある質問」だ。ここに詳細を載せて、Eメールでの問い合わせを減らすことができる。ピザ、天候、通貨等の情報を含めても良い。ここを注意深く読まず、掲載されている情報について問い合わせる者も確かにいるが、問い合わせる前にきちんと読み、自力で答えを見付けてくれる者の方が多い。Facebookの非公開グループを作り、正式登録者だけをグループに加えることを勧める。登録者限定で公開すれば、余計なチャットをしなくて済む。重要事項の通知にも利用できる。

広報冊子は二種類用意することを勧める。一つは「世界青年の船」事業とSWYAA国際大会のみを掲載したプログラムの広報用。もう一つはスポンサー向けにスポンサーシップの案内を掲載したもの。広報用はプログラムに焦点を当てたものでなくてはならない。自国で「世界青年の船」事業が知られていなければ、この冊子にプログラム情報を掲載してはどうか。訪問施設の窓口担当への広報として利用できる。スポンサー向けの冊子には、スポンサーシップの案内や、イベント支援の意義を納得してもらえるような情報を載せると良い。

参加申し込みの受付と対応：国際大会参加への申し込み手順は、主催者側にとっても参加者にとっても複雑すぎではない。常にインターネットにアクセスできる人が、参加申し込みの受付と対応をするべきだ。多数の参加者からの問い合わせに対し、迅速な返信が期待されている。登録と対応の担当者が同じ場合は、担当者が常時対応することができ、短時間で返信できることが重要だ。対応係が複数の場合は、問い合わせてきた参加者全員に確実に返信できるよう連携をよく取ること。

宿泊施設：参加者の宿泊先の決定には、非常に時間がかかり苦労した。実は宿泊費を抑えるため、準備に取り掛かる前から、三つ星または四つ星ホテルにすべての部屋の予約を入れる予定だった。だが、それだけの数の部屋を確保するには、国内の旅行代理店を通さなければならぬことが分かった。全部の部屋を一つのホテルに取ることもできなかった。ホテルの部屋の大半は、既に旅行代理店に押さえられていて、一つの旅行代理店では一定数の部屋の予約しかできなかった。必要な部屋数が予約できるのは、五つ星ホテルのコングレスホテルのみだっ

たが、それでは少々予算を超えてしてしまう。費用を抑えるために、トリプル・ルームの予約も考えたが、エキストラ・ベッドはほかのベッドに比べて寝心地が悪い。そのようなベッドに同一料金を取るの是不公平だと考えた。全員が同じサービスを受けられるように、ダブル・ルームのみを予約した。より快適さを求める参加者には、少し割高でシングル・ルームを準備した。

ホテルによって予約システムが異なる。部屋を隣同士にしたり、同じ階に予約したりできないこともある。部屋が離れていると不満を言う参加者がいるかもしれない。ルームメイトになった相手を拒否するかもしれない。

国際大会のホテルを決める際、ロケーションに最も配慮した。プログラム訪問場所の中心にあり、安全な地区にあること。公共の交通機関のアクセスも良いこと。実際、タクシムの方が中心に近く、ホテルの選択肢も多かった。だが、ここは抗議デモが度々行われ、参加者が警察官とデモ隊の闘争に巻き込まれる可能性があった。安全とは思われない地区であり、利点は多かったが、考慮の対象から外した。

私たちは様々なホテルを訪れた末、最高のホテルを見付けることができた。旅行代理店が手配したホテルでも、実際に足を運んでみるのが大切である。食事会場、ロビー、バスの駐車場の規模、エレベーターの数、部屋の大きさ、会議室等、重要な箇所の機能をチェックする必要がある。

支払い：ホテルを決定する前に話し合うべきもう一つの重要事項は、宿泊費の支払い方法である。ホテルに直接支払うか、旅行代理店を通じて支払うか、もしくは事後活動組織が支払いを受ける。私たちの場合は、海外からの送金に政府の許可が必要だった。手続きは複雑で時間がかかった。SWYAAトルコは、政府登録のNGOだが、事後活動組織や会員個人の口座にお金を受け取ることはしないことにした。旅行代理店を通すのがベストだった。

便利なのは、旅行代理店にすべての手配を一任することだが、それでは高額になり、参加費が高くなるので、私たちはすべてを代理店に任せることは望まなかった。そのため、旅行代理店を通す必要があるサービス以外は、自分たちで手配した。旅行代理店に丸投げをしていたら、自分たちの運営にはならなかっただろう。

後でトラブルにならないよう、合法的に支払い手続きを行うことが必要である。

多くの参加者にとって、早い時期からプログラムの参加を決めることができないため、事前に余裕をもって参加費を集めるのは少々難しいかもしれないが、それができれば後々楽である。インフレや為替レートの変動による影響を受けずにデポジットを支払い、場所やサービスが確保できる。

為替レート：主催者側の国がドルとユーロの為替レート変動による影響を受けて、これらの通貨で支払い手続きを行うには、細心の注意が必要である。損をしないようレートを設定すること。

レセプション：参加者が民族衣装を着用すれば、レセプションが特別なものになる。大勢の参加者がわざわざ遠くから衣装を持参し、数時間それらを着用することで、レセプションが華やかで、有意義なものとなる。これは非常に評価すべきだ。レセプションでの民族衣装の着用を勧めたい。民族衣装でレセプションに参加した者を対象に懸賞を企画しても良いかもしれない。

レセプションに欠かせない要素は音楽である。バンドによる民族音楽の生演奏があれば最も良い。それが難しいのであれば、プロのDJを雇っても良い。事後活動組織の会員で作曲ができる人がいれば、大いに役立つ。参加者の楽しみが増すだろう。

参加費：プログラムの企画が完成してから、参加費を決定すること。思ったより費用がかかるものなので、企画を決める前に費用を概算しないこと。常に目に見えないコストが生じるので、最終予算を出す際には、これらのコストを考慮すべきである。

訪問先：訪問先を選ぶ際は、SWY事業のコース・ディスカッションと似たような分野で訪問先を決めるようにすること。重複する分野の施設への訪問は避ける。参加者のそれぞれの関心分野に合わせて、変化に富んだ訪問先にすることが重要である。

訪問地：最も人気のある観光地に、参加者を連れていくことが重要である。だが、すべての見どころに連れて行くこと考える必要はない。国や訪問時期によっては非常に混雑し、一度に見て回ろうとすれば時間が無駄になるかもしれない。そのため、大人数のグループで行った方が都合の良い場所や、時間のかからない場所を訪問すると良い。残りの場所については、自由時間を設け、参加者が各自や小グループで回ることもできる。

交通手段：プログラムを成功裏に導くための重要な要素の一つは、交通手段の手配である。バスの質、ドライバーが道に詳しいこと、時間調整が重要である。計画通りにプログラムを進行するには、目的地までのバスのルートを考える必要がある。混雑した大都市では渋滞したり、道が狭い古い都市ではバスが通れなかったり、Uターンが難しかったりして、常にプログラムに遅れが生じる。

到着日と出発日における空港ホテル間の交通手段も問題になることがある。参加者の到着時間や出発時間がばらばらなので、空港への送迎は、プログラム中で最も骨

が折れる場面である。エアポート・シャトルの出発時刻を決めて事前に知らせておけば、参加者が空港で時間調整してくれるだろう。主催者側が空港で長時間待たされて、無駄に疲労するのを防ぐことにもなる。

事後活動協議会：協議会の開催方法についてどのように通知しても、事前に発表資料を送ってこず、ぎりぎりまで保留する参加国がある。実際、協議会には時間の余裕があるので、決められたタイミングで発表が行えるならば、全員に発表の機会を与えることができる。土壇場で発表資料を持参したとしても、全員に発表の機会を与えるよう臨機応変に対応すること。

食事：プログラム各日に自国料理を色々と楽しんでもらえるように、様々なレストランを手配すると良い。グループ全体を収容できる広さで、衛生面や食事の質も満足のいくものであること。順番待ちの列を作らないためにトイレが複数あることにも留意する。参加者の中にはベジタリアンや様々な食品アレルギーの者がいる。出された食事が食べられない参加者のリストを用意し、レストランでは彼らが食べられる食事を用意する。

オプション・ツアー：目的地は慎重に決定しなければならない。参加者に見る価値があると感じてもらえること。公式プログラムの会場から遠い場合は、移動に時間がかかり過ぎて、参加者が見学する機会がなくなってしまうように、交通手段の手配は慎重に行うこと。

すでに記したとおり、これは大いなる冒険であり、考慮すべき様々な課題がある。基本事項や詳細すぎることは触れていない。だが、例えばオリエンテーションの方法、適したスポンサーは誰か、どのようにすれば支援が得られるかなど、議論すべき多くの課題がほかにも多くある。国際大会主催国で経験を共有し、意見をまとめて一般ガイドラインを作成し、今後の国際大会の運営にいかすことができる。

国際大会は新旧の友人が一堂に会し、SWYの課題を協議し、事後活動の情報を共有するすばらしい機会である。また、私たちの記憶を新たにし、船上で共に過ごした日々を思い出させてくれる。私たちの絆をもう一度結び付けてくれるのだ。

国際大会の成功の一部は、参加者と実行委員の肩にかかっている。プログラムの準備と実施は大きな挑戦である。参加者と運営チームが力を合わせ、最善を尽くさなければならない。参加者が実行委員に協力せず、無駄に不満や批判をしているようでは、誰もプログラムを楽しめないだろう。

プログラムを計画する際、頭にとどめておきたいことは、参加者は貴重な休暇を過ごすために、遠方から国際

大会に集まってくるということだ。彼らの時間とお金、
労力を無駄にしてはならない。すべての瞬間を楽しんで
もらわなければならない。参加者全員にとって学びがあ

り、わくわくするような楽しい経験がしてもらえるよう
に私たちは最善の努力をした。次回の国際大会で、皆様
にお会いできることを楽しみにしている。